

日本の「古典文学講座

ガビン先生と

楽しく学ぼう！



「日本の古典文学」

十時と裏話



古典から見える昔の食生活

その2



令和三年六月二十五日(金)

十時 共原市総合市民センター

平家物語卷第一

祇園精舎乃鐘代聲

諸行世常此響有あり

安羅雙樹代花乃色

盛者必衰此空とり成あり

於之れ乃今も不_からず

只春乃長_は夢乃事

ふけも_の春も_も遂_もふ_らる_こい_ぬ

物_も風_も代_も前_も乃_も常_も同_し

祇園精舎の鐘の音には

万物は変転し、同じ状態でとどまることはないと

郷音まじりがある

沙羅の樹のサハの色は

盛んな者も必ず衰えるという、この世の道理を

示している

栄耀栄華におこる者もそれを長く維持できる
ものではない

ただ春の夜に見る夢のようである

勢に盛んな者つひには滅んでしまふというは

まさに風の前にある塵のようなものである



チツツバキ



↓ 落ちる

散る

よく日本にあるのは
代用(外)にあるもの

白くなった

もともとは淡い黄色の花

→ インド原産

春に白い花を咲かせる ジャスミンに近い香り

耐寒性が弱い 日本では育たない

日本を育てるには温室が必要

沙羅

沙羅双樹

お釈迦様が旅の途中、お寺となりた
横たわった場所に二本の沙羅の木があった
お釈迦様の死を悲しむ真白な花を
咲かせた。朝咲いた花は夕には次を散り
お釈迦様の上に舞い散り覆った

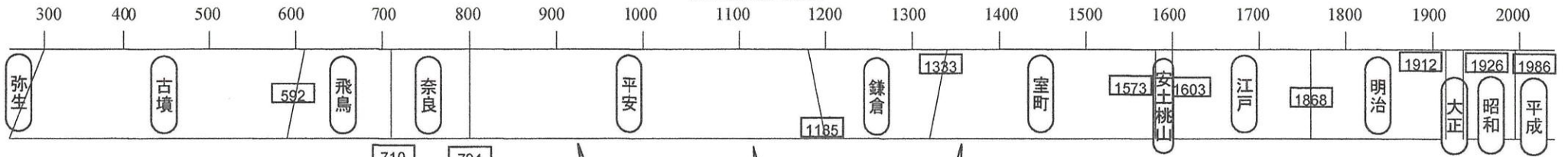


仏教で生命の木 (若返り、復活)

文学作品の時代はいつ?



今回の年表



古事記
712和銅5
太安万侶が編纂
元明天皇に献上
勅撰?の史書
神代の天地創造
から
推古天皇の時代
神話や伝説も含む

風土記
713和銅6
律令制度
の整備
日本国の統一
↓
各国の事情を
知るため
↓
風土記の編纂
「続日本紀」
地方統治の指針
正式な公文書
「解」

万葉集
759天平宝字3
~780宝亀11
勅撰?
橘諸兄?
大伴家持?
万の言の葉
「古事記」
後葉に伝える
(後の世)
20巻
4500首あまり
天皇、貴族
役人、農民
民謡など
さまざまな人の
さまざまな歌

伊勢物語
910~
950??
在原業平を
思わせる男を
主人公にした
短編歌物語集
作者不詳
紀貫之?
能の演目へ
「井筒」
「雲林院」

大鏡
1070??
天皇や貴族など
について
年ごとに起きた
出来事や
エピソードを
書き記した
歴史物語
文徳天皇から
850 嘉祥3
後一条天皇
1025 万寿2
長命な老人二人
が雲林院の菩提
講で語り合い
若侍が批評する
対話形式で
話がすすむ

徒然草
1349??
兼好が
書いた随筆
吉田兼好
卜部兼好
兼好法師
244段から成る
兼好の
思索や雑感
逸話を多岐多様
にわたり
順不同に語る
隠者学
兼好は仁和寺が
ある双ヶ丘に
居を構える



200年頃 中国「三国志」

日本では

「大隅国風土記」713 (和銅也) 口嚼み酒

村中の男女が生米をかんでは、容器に吐き戻す、

水を加えて一晩以上おいて酒の香がしたら飲む

「播磨国風土記」716 (豊後也) 麴カビの糖化作用

干し飯が水に濡れてカビが生えた、

それをもとに酒を造る

清酒 (日本酒に近い)

「万葉集」759 濁り酒、黒酒、白酒、糟湯酒

黒米、白米、白濁酒



「古事記」712

酒の献上

平安時代 寺にて 菩提泉

「延喜式」927

967

米と麴で酒造

「今集解」868 宮内省に清酒司 60人の酒部を指す

「清酒の禁」(2) (寛長4)

大宰帥大伴御讚酒歌十三首

萬葉集三

⑥

驗無物乎不念者一杯乃濁酒乎可飲有良師
酒名乎聖跡負師古昔大聖之言乃宜左

古之七賢人等毛欲為物者酒西有良師

賢跡物言從者酒飲而醉哭為師益有良之

將言為使將為使不知極貴物者酒西有良之

中之尔人跡不有者酒壺二成而師鴨酒二染嘗

病醜賢良乎為跡酒不飲人乎熟見者猿二鴨似

仙無宝跡言十方酒飲而情乎遣尔豈益日八方

夜光玉跡言十方酒飲而情乎遣尔豈若日八方

世間之遊道尔怜者醉泣為尔可有良師

今代尔之樂有者來生者虫尔鳥尔毛吾羽成奈武

生者遂毛死物尔有者今生在而者樂乎有名

默然居而賢良為者飲酒而醉泣為尔尚不如來

大宰帥大伴卿の酒を讃めし歌十三首

駿しるしなき、ものを思はずは一杯いちぱいの濁れる酒を飲むべくあるらし
酒の名を聖せいりと負おほせし古いにしへの大おほき聖せいの言ことの宜よろしき
古いにしへの七ななの賢さかしき人たちも欲ほりせしものは酒にしあるらし
賢さかしきと物言ふよりは酒飲みて酔よひ泣なきするし優まことりたるら
言はむすべせむすべ知らず極きはまりて貴たかきものは酒にしあるら
なかなかに人とあらずは酒さかづ壺はになりにて、かも酒に染しみなむ
あな醜みにく賢さかしきをすと酒飲まぬ人もよく見は猿さるにかも似る
酒さかなき、空あそといふとも一杯いちぱいの濁れる酒におにまさめぬも
夜よる光る玉たまとふとも酒飲みて心を遣やるにあじかぬやあ
世の中の遊あそびの道にたのしきは酔よひ泣なきするにあるべかる
二の世にし楽しくあらば来きむ世には虫むしに鳥とりにも我われはなかなむ
生まるれば道にも死ぬるものによれば二の世なる間は楽しくを
もた居りて賢さかしらするは酒飲みて酔よひ泣なきするたなほしかずけ

大宰帥大伴旅人卿が酒を褒め讃えた歌十三首

338 何の甲斐もなし物思ひをするくらひなら一杯の濁り酒を飲むべきであるらう

339 酒の名を聖人と名付けた古の大聖の言葉の適切だよ

340 古の七賢人もまた飲するものはもっぱら酒であらう

341 賢くてもものを言うよりは酒を飲んで酔い泣きする方がまさっている

342 言のよもなく致しようもないほど究極の貴重な物は酒であるらう

343 なまやかに人間であるよりは酒壺になてしまったらそうしたら酒に浸るべ
いられるだらう

344 あれ見苦しき賢明ぶって酒を飲まなし人をよくと見ると様にも似ているかな

345 酒の知れない珍宝といつても一杯の濁り酒にどろけてまさらうか

346 たとえ夜光る珠玉であつても酒を飲んで思ひ晴らすのにどうして及ぼうか

347 人の世の遊びの道において最も楽しいことは酔ひ泣きをするにあるらう

348 この現世に楽しくしていられたら来世には出にも鳥にもなつてしまおう

349 生まれたら後には必ず死ぬと決ましているものだからこの世に生きてゐる間は
楽しんでゐよう

350 黙っていて賢明にしているより酒を飲んで酔ひ泣きする方がまさっている
やむを得ない

338 全十三首の総論 「酔ひま物思ひ」妻を失たた大伴旅人の胸中

339 清酒の聖人「獨り酒の酔ひ者」（酔者たちが） （秋かに呼んだ） 一个中国、魏、禁酒令

340

341

342 酒そのものの讃歌（飲酒ではない）

343 中国の三国時代の呉の大夫鄭泉 酒を好むあまり死んだら墓場の側に埋めよ
化して陶土となり「酒瓶」を作らしたとの遺言

344

345

346 随候が得た「夜光珠」は天下の至宝

347

348

349 詩文の多くは「はかなし人生だからこそ」せめて酒を飲んで飲樂を尽そう

350 仏典「賢聖」賢人の黙然としてる（少酔はらって酔つてるを）

驗無物乎不念者一杯乃濁酒乎可飲有良師

駭しやうなまき

考えても社名ない
何の甲斐もなすく

ものを思はずは

物思ものしするところなら

一杯ひとつきの

一杯の

濁たぐれる酒を

濁り酒を

飲のむべくあるらし

飲のむのが良いい

萬葉集 三三八 卷三

中国文学を積極的に取り入れた

中国の竹林の七賢の故事

社会の束縛を嫌って世俗を棄て
竹林の中で酒や狂言に遊ぶ清談した

一杯の酒を飲む → 無駄は物思

中々人跡不有者酒壺二成而師鴨酒二染嘗

なかなかに

なまやかに
なまじか
中途半端に

人とあらずは

人間であるようには

酒壺サカフツボに

酒壺サカフツボに

かよりにてしかも

なんじきだんぞうしたら

酒に染みなむ

酒に染みこまれるぞう

甘露集 三四三 第三

形式ばかりを重んじる真心の無い生まら

理想 酒を飲んで心りきまらな生まらる生まら

せり大のむいまうちあまこいまそかわ

ゆわかも河原原よりよ大糸糸めわに糸を

いそむも一珠く流くわてはか之路ひたわ跡

明月乃つまむつまうたる菊の花は流るひきか

里かすふあ糸乃ちこさまよ丸野るかり見こ

るもわり一物あけもて海にわたりに乃との

乃亦も一珠成はむさうしんまこさるこ糸あ

里かふるかす針おきふたい一交乃あまには

いすのさる人にあままをさつていふあま

志平のさよしつらあまにらんあまあま

つらするあまこしりよぶるなん

むかし左のおほいまうちぎひまそがり

けり 賀茂河のほとりに六条わたりに家を

いとおもしろくつくりてすみたまはけり神

那月のつごもりがた菊の花うつろひせかり

かゝるに紅葉のちぐさに見ゆるさうみこ

たちおほしまさせ夜がけもて酒くほとこ二のどの

のよもしろきをばむるうたよむ そ二にあ

りけるかたのおきふたきこのしたには

こあるきく人にみなよませ^はてよめる

しほがまたいつか来にけん 朝なまきに

つりする船は 二二にすらいかん

ふら流あるを其流のがむじつよ

まじりてしむさるハまじり乃人ありハ

あよなきでやーおいづ動てまむる

あきれ油たりとむふとまあひそ

おましとつろよぬぬありあそれり

おのりやうなるもれくさなふなと見物

あれらうち~~ま~~こ見うりーていふやう

先頃、雲林院の菩提講に

先頃、私が雲林院の菩提講に

詣でて侍りしかば、例人よりは

参詣しておりましたところ
ふつうの老人よりは

こよなう年老いうたてげなる

格段年を寄り
異種な感じのする

翁二人、姫といきあひて

老人二人
老か下が
偶然に出会って
夏山繁樹 180
重木

おほやけのよつぎ
大宅世継次 190

同じ所に居ぬめう。あはれに

同じ場所に居たよるでいた
「トよくまゐる」

同じやうなるもの「さういふ」と見侍りに

同じやうな老人を
たいてい「さういふ」と
眺めておりました

これらうち笑ひ見かけると言つやう

二の老人たちは
互いに笑つて
顔を見合せて
言つたに付

藤原氏系図

華麗なる一族

安子

冷泉天皇
詮子

兼家
(大入道)

道長
(この殿
入道殿)

道兼

道綱

道隆
(中の関白
父大臣)



彰子
教道
頼道

一条天皇

定子

隆家

伊周
(帥殿)

道頼



大鏡

歴史を明らかに
映し出す優れた鏡

世継物語

(八五〇—一〇二五) 十四—一七六年

文徳天皇 後一条天皇

道長の栄華が軸

徒然草

しほくたせり

白

すまじふ

あはれ

あはれ

あはれ

つれづれ種

つれづれなるままに

かみにもなぐ
手持ち無沙汰に

日暮らし

一日中

硯にむかひて

硯に向かひて

心にづしむくまなこなるじらよざい

心に
まなこを
じらよざい

そこはかとななく書文づくらば

そこは
かとななく
書文づくらば
とらとめも
なく
書文といふと

あやしうこそものぐるほしけれ

あやしうこそ
ものぐるほしけれ
正気も失つて
あるよふに

此の書は、
一、
二、
三、
四、
五、
六、
七、
八、
九、
十、
十一、
十二、
十三、
十四、
十五、
十六、
十七、
十八、
十九、
二十、
二十一、
二十二、
二十三、
二十四、
二十五、
二十六、
二十七、
二十八、
二十九、
三十、
三十一、
三十二、
三十三、
三十四、
三十五、
三十六、
三十七、
三十八、
三十九、
四十、
四十一、
四十二、
四十三、
四十四、
四十五、
四十六、
四十七、
四十八、
四十九、
五十、
五十一、
五十二、
五十三、
五十四、
五十五、
五十六、
五十七、
五十八、
五十九、
六十、
六十一、
六十二、
六十三、
六十四、
六十五、
六十六、
六十七、
六十八、
六十九、
七十、
七十一、
七十二、
七十三、
七十四、
七十五、
七十六、
七十七、
七十八、
七十九、
八十、
八十一、
八十二、
八十三、
八十四、
八十五、
八十六、
八十七、
八十八、
八十九、
九十、
九十一、
九十二、
九十三、
九十四、
九十五、
九十六、
九十七、
九十八、
九十九、
百、
百一、
百二、
百三、
百四、
百五、
百六、
百七、
百八、
百九、
百十、
百十一、
百十二、
百十三、
百十四、
百十五、
百十六、
百十七、
百十八、
百十九、
百二十、
百二十一、
百二十二、
百二十三、
百二十四、
百二十五、
百二十六、
百二十七、
百二十八、
百二十九、
百三十、
百三十一、
百三十二、
百三十三、
百三十四、
百三十五、
百三十六、
百三十七、
百三十八、
百三十九、
百四十、
百四十一、
百四十二、
百四十三、
百四十四、
百四十五、
百四十六、
百四十七、
百四十八、
百四十九、
百五十、
百五十一、
百五十二、
百五十三、
百五十四、
百五十五、
百五十六、
百五十七、
百五十八、
百五十九、
百六十、
百六十一、
百六十二、
百六十三、
百六十四、
百六十五、
百六十六、
百六十七、
百六十八、
百六十九、
百七十、
百七十一、
百七十二、
百七十三、
百七十四、
百七十五、
百七十六、
百七十七、
百七十八、
百七十九、
百八十、
百八十一、
百八十二、
百八十三、
百八十四、
百八十五、
百八十六、
百八十七、
百八十八、
百八十九、
百九十、
百九十一、
百九十二、
百九十三、
百九十四、
百九十五、
百九十六、
百九十七、
百九十八、
百九十九、
百十、

世にはじめぬ事のおほきなり

なにごとも

さけをすめてしむのませたるをけうすること

いかなるゆへとも心えずのむ人のかほ

まゆをひそめ人めをはかりてすてんとしにげんとするを

とらへてひきとめてすろにのませつればうるほき人も

たちまちに狂人となりておこがましくそくさ

なる人もめのまへに大事の病者となりて前後も

しらすたふれずいはふべき日などは

かりぬべーあくる日までかしらいたく物くはず

によむふー生をへだてたるやうにて昨日の

ことおぼえずおほやけわたくしの大事をかきて

わすらひとざる人をしてかかるめを見すること慈悲

もななく礼儀をそむけりかくからきめに

多

強飲

得ず飲

願

堪

眉

目

捨

迷

捕

飲

息災

目前

知

倒

伏

祝

頭

食

吟

隔

事覚

公

私

欠

煩

目

辛

目

世間には念点のゆかぬことが多いものである。何か事があるならば

まず酒をすすめて、むりやり飲ませているのをよもやうにこととする
のは

どういふわけなのかわけがわからない。酒を飲む人の顔がともも
がまんできずもたない様子で

眉をしかめ他人の目をうかがって酒を捨てようとし、また逃げ出そう
としてゐるのを

つかまえてひきとめて、おたふらに飲ませてしまつと、まぢんとしてゐる
人も

たちまちのうちに狂った人のようになつて、ばがげた振舞をして健康な人も

見ているうちに夏い病人となつて、女とさきも

わが身を倒れてしまふ。お親をすすることになつてゐる日は
あきらめなされたことに

なつてしまふに気がない。あくる日まで頭がいたくものも食わずに

つめきながら寝ていて、まるで生を隔てた前生のことのように
昨日のことを

覚えておらず。公私の重要なことも果たせないで

くの迷惑となる。人にこんな目を見せることは思ひやりいじ

もたなく礼儀にそむつてゐる。このようなつら、目に会つた人は